

日本語教員養成課程の学生による日本語ボランティア

西谷 まり

要旨

日本語教員養成課程受講中の日本人学生のボランティア活動について報告する。日本語教員養成課程の受講者がボランティアで留学生の日本語サポートにあたることは、日本人学生と留学生の双方にメリットがある。留学生にとっては、言語学習についての知識とボランティアをする意欲のある大学生からサポートを受けられる、日本人学生にとっては、日本語教員養成課程で学習した内容が実際に留学生との交流の場で生かせるので、学習の強い動機づけになるだけでなく、教室では得られない多くの気づきを得、暗記型の学習を離れ、自ら考え、問題解決する力が養われるという点で意義があると考えられる。

キーワード 日本語教員養成課程、ボランティア、学習動機、気づき、問題解決

1. はじめに

本稿では津田塾大学の日本語ボランティアと一橋大学の留学生の一年半に及ぶ交流の経過について報告し、その意義について考えてみたい。筆者は一橋大学留学生センターにおいて留学生を対象とした日本語科目を担当する傍ら、津田塾大学において日本語教員養成課程の必修科目「日本語教授法」クラスを担当している¹。津田塾大学は英文学科、国際関係学科、情報数理工学科の3つの専攻を持っているが、そのどの専攻の学生も履修可能な副専攻として、日本語教員養成課程が設けられている²。

しかし、留学生の数は非常に少なく³、日本語教員養成課程の科目を履修している学生が学内で留学生に接する機会は多くない。一方、一橋大学には現在450名近くの留学生が在籍しており、日本人学生との接触を希望している学生も多い。そこで、津田塾大学の日本人学生と一橋大学の留学生との交流を図ることは双方の学生にとってメリットがあると考え、1998年度冬学期から学生の交流を開始した。

1998年度冬学期は一橋大学留学生センター日本語日本語研修コースの学生のうち日本語未習者の学生7名、1999年度夏学期は日本語研修コースの日本語未習者の学生6名と日本語力中級レベルの交換留学生7名および大学院研究生3名の合計16名、1999年度冬学期は

¹ 津田塾大学では前期、後期と呼んでいるが、一橋大学の呼称にあわせるために、4月からの学期を夏学期、9月からの学期を冬学期と呼ぶことにする。

² 1990年度に設置され、必修科目7科目の登録人数は90年度178名(述べ人数)で単位取得人数が110名だったのに対し、95年度には556名が登録し449名が単位を取得、98年度には709名が登録、586名が単位を取得している。修了証明書取得者は毎年約50名である。

³ 1999年度冬学期に在籍している留学生は学部レベルで8名(正規生1名と交換留学生7名)、大学院レベル7名の合計15名である。

日本語力中級レベルの交換留学生2名および大学院研究生6名の合計8名、合計31名の留学生に対して津田塾大学の学生がボランティアとして日本語学習のサポート等に当たった。津田塾大学側は原則として二人ひと組で留学生に対応したため、その倍の人数の日本人学生がボランティアに関わってきている⁴。

2. ボランティアの実際

日本語教員養成課程の修了要件は必修科目として「日本語教授法」「日本語教材・教具論」「第二言語習得論」「日本語教授法演習」12単位、「日本語学概論」「日本語文法概論」8単位、言語学の選択必修科目「言語学概論」「日英語の比較」「意味・語用論」「音韻論」「文法論」「社会言語学」の中から4単位及び日本文学、異文化コミュニケーション関連等の自由選択科目の中から4単位の合計28単位を取得しなければならない。

「日本語教授法」は二クラス開講されていて、それぞれ定員が35名(最大限40名)となっている。授業内容は、二クラスともほぼ同じである。夏学期は『Approaches and Methods in Language Teaching』(CAMBRIDGE)と『日本語教授法』(おうふう)をテキストにして、主要な外国語教授法とその背景にある言語観、言語学習観を学習し、外国語のミニレッスン⁵を行っている。冬学期には日本語教育の初級教科書を用いて、学習項目の分析、授業計画等の方法を具体的に学習し、模擬授業⁶を行うことが主なクラス活動である。

ボランティア募集については、授業の初日に以下のような情報を書面で提示した。「一橋大学で日本語を学んでいる留学生に対して、週に一度程度、授業でわからないところの質問を受けたり、会話の練習を行うボランティアを募集します。二人ひと組で留学生一人に対応することが基本です。積極的な参加を期待しますが、これは授業の評価とは一切関係ありません。」そして、ボランティアを希望する学生には、話せる外国語、外国滞在や旅行等の海外体験、出身国や母語など対象留学生の希望、日本語ボランティア経験、ボランティアをする理由等を書かせた。「現在外国人をサポートするボランティアをしている」学生もいたが、「日本語教師になりたい」「海外青年協力隊に参加したい」「海外留学先で日本語を教えたい」といった将来のための準備、「日本語という言葉自体に興味がある」「教室で教わったことを実践に生かしたい」といった言葉や学習内容に対する興味、「外国人留学生と交流したい」という交流への意欲の3種類の動機が見られたが、それぞれが独立したのではなく、それらの動機が入り交じってボランティアを希望した学生たちである⁷。

その資料に基づいて津田塾の学生と留学生とを組み合わせたのが、その際、日本語教育の専門家になりたいと希望している学生や、ボランティアをしたことがある学生など日本語

4 常に二人で留学生に接していたペアもあるが、一人ずつ隔週でボランティアを行ったり、月曜日はAさん、水曜日はBさんのように曜日を分担してボランティアを行っていたペアもある。

5 日本語、英語以外の外国語を用いて教授法を体験学習する。

6 日本人のクラスメートを対象として、日本語教科書を用いた日本語授業を体験する。

教育に関する技術や意識が高いと思われる学生には、日本語の学習進度が遅れ気味の留学生に優先的に配置するなどの配慮をした。組み合わせが決まると、留学生の連絡先を津田塾大学の日本人学生に伝え、日本人学生の側から連絡をとらせた。ボランティア活動を行う場所、頻度、日時、内容は相談の上きめるように伝えた。実際にボランティア活動を行った場所は一橋大学の留学生の寮である国際交流会館のホール、学生食堂、空き教室、喫茶店とさまざまであるが、頻度は週に一度が大半で、平日の夕方か休日の昼間の時間帯が多かった。

日本人学生と留学生を組み合わせ、「あとは御自由にどうぞ」ということでは円滑に交流が進まない場合がある。ボランティアが留学生の日本語サポートを円滑に行うために配慮したのは以下の3点である。

- ① ボランティアの場は「日本語を教える実験台・練習台」ではないことを意識させる
留学生のニーズに応える、つまり、自分の教えたことではなく、留学生の教えてもらいたいことを優先するように指導する。
- ② コーディネータが進行状況を把握する
日本人学生と留学生に対して、定期的に途中経過を報告させ、学期末に実践報告と感想を提出させるなどの方法で、進行状況を把握する。問題があった場合にコーディネータに相談できる体制を作り、迅速に対応する。
- ③ ルールを決めておく
ボランティア期間を半年なり一年なりに区切り、それ以上長く続けたい場合はお互いに話し合っ決めてるように伝える。「約束はきちんと守る。」「何かの理由で続けられない、或いは、続けたくない状況になったら、速やかにコーディネータに相談する。」などのルールを決めておく。

筆者は津田塾大学と一橋大学の両大学で講義を担当していたので、一人でコーディネータの役割が担えたが、そうでない場合には、日本人学生側と留学生側のコーディネータを別々に作り、二人のコーディネータが緊密に連絡をとることによって同じような対応をすることは十分に可能であると考ええる。その際、E-mailは非常に有効なコミュニケーション手段となるだろう。筆者と津田塾大学の学生とは、週に一度授業で会う以外には、E-mailで連絡をとりあった。

実際どんな活動をしたかを津田塾大学の学生の学期末報告レポートから見てみよう。日本語研修コースの学生は日本語未習者、交換留学生・大学院研究生はすべて中級前半から

7 三浦香苗ほか(1999)は、ボランティアの日本人学生ボランティアについて「留学生と交流したいというような漠然とした動機よりも、語学を教えた経験があったり、将来語学を教えようと思っているなど、具体的な目的をもっている学生のほうが活動の参加が積極的で長続きすることがわかった。」と述べている。

後半にかけての日本語レベルの学生である。

- ・授業で使っている日本語の教科書を使って教えた。(日本語研修コースの学生担当)
- ・黒板を使いながら文法や言葉のわからないところを教えた。(日本語研修コースの学生担当)
- ・ゼミで扱う経済の日本語の文章の内容をかみくだいて説明したり、作文の日本語をチェックしたりした。友だちのように接していた。(交換留学生担当)
- ・おしゃべりをしたり、日本語の宿題を手伝った。(交換留学生担当)
- ・テレビで聞いた日本語など、日常生活で耳に入ってきた言葉の意味を聞かれた。(交換留学生担当、大学院研究生担当)
- ・街を歩きながら、看板の漢字について質問をうけた。(交換留学生担当、大学院研究生担当)
- ・顔黒、厚底靴など日本の現代の若者事情について討論した。(大学院研究生担当)
- ・日経新聞と一緒に読んだ。(大学院研究生担当)
- ・レポートや作文の日本語を直すのを手伝った。(大学院研究生担当)

ボランティアが行った活動内容をまとめると、日本語未習で来日した学生には日本語の授業理解のための援助、交換留学生には会話練習の相手や日本語に関する疑問に答える、大学院研究生には専門の学習のための日本語の援助といった内容が中心になっているようである。

3. 日本語教師養成課程受講生が日本語ボランティアをすることの意義

日本語教師養成講座の受講生と留学生の日本語ボランティア交流は、双方の学生にとってどのようなメリットをもたらしているのだろうか。

一橋大学の留学生に対して行ったアンケート調査の結果では、留学生ほぼ全員が、ボランティアの説明が「わかりやすい」「よく準備してある」、態度が「とても素晴らしい」「熱心」「親切」といった肯定的評価をしている。日本語教員養成課程受講中の学生は、言語理論、学習理論、教育方法等について学習していることが、このような肯定的評価をもたらしていると推測される。

日本語教育について素養のない日本人ボランティアに対して、研修や助言を行っている実例がいくつか報告されている。三浦香苗ほか(1999)⁸は、留学生を援助する日本人ボラ

⁸ 留学生にも日本人学生にも双方に利益があり、また双方が能動的活動に参加できることを目指した留学生と日本人ボランティア・チューターの『能動的共同活動』の実例を報告している。授業の一貫として行うもので、日本人学生は日本事情の知識を得るために役立つ活動を計画・実施し、留学生は自分の国について紹介するスピーチを行う。

ンティアについて、あまり助言や指導がなされることはなく、個人の努力に任されていたことに対する反省から、日本語教師がボランティア学生に対して、活動の前と後に、活動の内容や日本語の話し方について助言をしている。また、庄司恵雄（1999）によれば、岡山大学では、日本語ボランティアに対して、留学生センターの日本語教官が「通常週に3日間、30分間の休みを利用して10週間」日本語に関する基礎知識を教える研修を行っているということである。

それに対して、本稿でとりあげた日本語教員養成課程受講中の学生は、ある程度の知識をもっているので、新たな研修を行わなくても、主体的な日本語ボランティアを行うことができる潜在能力を有している。つまり、一橋大学の留学生にとってのメリットは、日本語教育について勉強していて、しかもボランティアで留学生をサポートしたいという意欲のある学生に援助してもらえることである。

では、日本語教師養成講座の受講生にとってのメリットは何だろうか。第一に、日本語教員養成課程で学習した内容が実際に留学生との交流の場で生かせるため、学習の強い動機づけになること。第二に、教室の学習だけでは考えもつかない「気づき」が芽生えることである。

第一の学習の動機づけについては、ボランティアに参加した学生は、言葉、文型の使い分けや日本語の教え方についての質問を積極的に投げかけてきた。『ひとつ』と『一個』の使い分けはどうするのか?』といったものは、冬学期の初級日本語の模擬授業の内容と関連があるが、『増える』と『増加する』は似たような表現だが、この文章の場合『増加する』という表現がふさわしい理由をどのように説明したらいいか?』といった授業では扱えない中級以降レベルの教え方についても相談を受けた。また、「留学生と会話をする時、留学生がまだ習っていない日本語を使ってもかまわないか?』といった、実際に留学生に接していなければ出てこない類の質問もあった。こうした問題を解決するために、参考図書を紹介してくれという要望があった。一橋大学主催の日本人向けの異文化理解講座⁹にも、ボランティア活動中の数名の学生が参加した。

さらには、日本語を教えることのおもしろさに目ざめ、職業として日本語教師を真剣に目指しはじめる学生も現れた。筆者担当のクラスの学生は40名であるが、大学院進学等を視野に入れて日本語教師を志している学生が少なくとも4名いる。これらの学生はすべてボランティア活動参加者で、そのうちの一人は「ボランティア活動をするまでは、日本語教師になろうとは全く考えていなかったが、活動をしていくうちに、だんだん魅力を感じるようになり、今ではどうしても日本語教師になりたいと考えて大学院の情報を集めている」と述べている。

⁹ 「続・留學生理解のための基礎講座」というタイトルで、留學生受け入れ日本人ボランティアを主な対象とした留學生理解のための連続公開講座(4回)。

ボランティア交流が実際に日本語教授法の授業に反映された好例として、1999年度夏学期のミニレッスンの発表でシンハラ語の初級文型をとりあげたグループがあげられる。夏学期に使用している『Approaches and Methods in Language Teaching』は、さまざまな外国語教授法の言語理論と学習理論を解説し、実際のレッスンの流れを紹介しているテキストである。学生は4人程度のグループで一つの教授法にのっとった外国語のミニレッスンの教師となって入門レベルの授業を行い、レッスン担当以外の学生は学習者の役割をする。これまで教師役 of 学生たちが取り上げた言語は、主として大学で第二外国語として学習できる中国語、フランス語などであるが、これらの外国語の場合、学習者役のなかにすでに既習の学生がおり、ミニレッスンの臨場感がそがれてしまう傾向がある。これに対して、クラス全員の知らない言語、シンハラ語を使ったレッスンは大好評だった。このレッスンはスリランカの女性留学生のボランティアをしていた学生たちが、留学生にシンハラ語を習って試みたことだった。シンハラ語を取り上げた理由を、学生たちは「日本語がまったくわからないスリランカの学生に日本語を教えてみて、自分もまったく未知の言語を学習する体験を試してみたくて、留学生から教えてもらった」と述べている。

第二の「気づき」について考えてみよう。冬学期の「日本語教授法」クラスは初級教科書を用いて日本語を教える模擬授業が中心である。本来であれば、外国人を対象に行うことが望ましいが、その実現が難しいことが多いため¹⁰、日本語が母語である日本人を相手に初級日本語を教える形態になってしまう。模擬授業を受けている日本人学生は「外国人になったつもりで」という設定で行ってはいるが、難しい日本語を用いた説明も簡単に受け入れられ、練習はスムーズに進み、答えにくい質問が出ることも少ない¹¹。それに対して、学期末のボランティアの報告には「自分自身が日本語についてわかっていないことに気がついた」「自分ではわかっていてもうまく留学生に説明することができなくてもどかしい思いをした」という感想をよせる学生が多かった。留学生から出された質問について、自分の言語生活を内省し、類義語辞典、文法解説などを調べて四苦八苦しているうちに「自分の母語を教えるのは簡単だと甘く見ていたが、大変な訓練が必要だ」「母語を教える勉強とは、その言語をすでにマスターした状態にしながら、言語の仕組みを理論的に分析することだ」という認識に至った学生もいる。実際に外国人に接することによって、第二言語としての日本語を教えることの難しさに気づくことができたわけである。

中級レベルの留学生を担当したあるボランティア学生は、初めは留学生の日本語力が完璧だと感心していたが、回数を重ねるうちに「彼は完全に私の言うことを理解しているわけではないらしい。言葉を全部理解しているのではないが、文脈から言いたいことを推測

¹⁰ 実習あるいは演習という形で外国人を対象とした授業を行っているところもある。

¹¹ 外国人日本語学習者と接触をもつ活動は「日本語教授法演習」で行われているが、「日本語教授法」履修後にとることになっている。

しているのだ」ということに気がつき、「円滑なコミュニケーションが成り立つことと、一つ一つの言葉の意味を理解するということとは違うのだ」という認識をもつようになった。話し言葉と書き言葉の習得の時間的ズレ、対象者による言葉の使い分けの難しさについて気がついた学生も数人いた。「会って話しているときはさほど言葉の問題はないのに、メールを通して文章に触れると、時々尋問されているような言葉づかいにドキッとさせられた」経験を通じて、「日本語は話し言葉と書き言葉が随分違う」こと、「適切な書き言葉の習得も重要」なことに気づいている。スピーチレベルの重要さに気づいた学生は「日本語は文の丁寧さによって、表現の大部分が変化することがわかった。留学生にとって、彼等と同年代の学生と仲良くなるための言葉も必要であるし、指導教官と応対するときなどはきちんとした丁寧語も必要であるが、それを使いわけるのはかなり難しいことだ」と述べている。

また、日本語未習の学生を担当した学生は、半年という期間を延長して援助を続けるうちに、留学生にとって本当に自分たちの援助が必要なのか、ボランティアというのはどういう立場なのかについて悩み、「学習者の負担にならず、なれ合いにもならず、学習の助けになるようなボランティアのあり方」を考えるようになったという。

4. 今後の展望

日本語教員養成課程で学んでいる日本人学生によるボランティア活動は、援助を受ける留学生、日本人学生双方にとって有益な交流となるはずである。援助を受ける留学生側が受けるメリットは言うまでもないが、援助する側の日本人学生にとってのメリットもはかりしれない。「いい友だちになった」り、「留学生の生き方に感化された」りすることにも意味があるが、それ以上に重要なことは、教室での学習が実践の場では直接には役にたたないことがあることを知ることであろう。いろいろな問題につきあつた時に、自ら問題を解決していく過程で、教室活動以上のものを得ていることが、学生の報告から読み取れる。たとえば、中級レベルの学生を担当した学生は「私の英語にも言えることだが、ある程度のレベルに達すると、自分の知識内で十分意思疎通してしまうので上達しなくなる」ことが、留学生にもあることに気づき、どうしたらいいか試行錯誤の後、「最近はそのレベルの向上のために、会話のなかに意識的に難しい表現を使い、彼が質問してきたら、どういう時にどうやって使うかを例文をまじえて説明するようにしている」と述べている。

このような気づきと「例文をまじえて説明する」といった対応は、1度や2度のミニレッスンや模擬授業では得られない貴重な体験であろう。暗記型の学習を離れ、自ら考え、問題解決する力が養われると考えることができる。

今後は、ボランティア学生と留学生に対する継続的な調査に加えて、ボランティアを経験した学生と経験しなかった学生との比較等も通じて、ボランティア学生の学習動機をより高め、気づきを促す方策をさぐり、ボランティア学生と留学生双方にとってより有益な交流を進めていきたい。

【参考文献】

- 庄司恵雄 (1999) ボランティア・ハンドブック『きょうから留学生ボランティア』岡山大学留学生相談室
三浦香苗ほか (1999) 「留学生と日本人ボランティア・チューターの能動的共同活動『日本・世界事情』」
『日本語教育方法研究会誌』Vol.6 No.2